

### 3. 九大を退官するにあたって

(大学広報 No.787 (1992) より転載)

高 島 良 正

私が九大理学部を卒業したのは昭和28年3月で、旧制度の大学の最後と新制大学の最初のクラスが同時に卒業した折りでした。そのため多数の卒業生の割に教職や企業は狭き門で、適当な就職先もなく、指導教官の勧めに従ってただ何となく大学院に留まりました。私は幼い時から軍人志望で、広島陸軍幼年学校へ進み、ひたむきに馬上に跨る陸軍大将を夢見ていましたので、戦後一般社会へ復帰した後も虚無感から脱しきれず、九大にも何となく入学し、あまり勉強することなくやっと卒業できたような次第です。しかし大学院に在籍している間に先輩の助手の方々が他大学へ栄転されることなどあって、初め教務員として就職し、助手、助教授、教授へと次々に昇進し、早や40年の歳月が経ってしまいました。

今、定年の日の前にして時折昔の写真を取り出して懐かしく見ていますが、昔の箱崎キャンパスは車もほとんどなく松の緑濃い静かなたたずまいで、学問の府に相応しいものでした。また、箱崎や名島あたりも、白砂青松と清澄な蒼い海が見られ、この40年間に随分自然破壊をしたものだと痛感させられます。

私の専攻は放射化学といって、自然界における放射性物質の挙動の追跡や人工放射性物質の利用を追求する学問です。近年世界的に核エネルギーが人類の豊かな生活のために利用されるようになり、ウィーンにその調整機能を持つ国際原子力機関がありますが、私はそこで技術顧問を務めたこともある関係で、九大在任中にしばしばヨーロッパを訪れました。そしてヨーロッパの森、湖、それにマッチした街並みなどの美しさに感嘆しましたが、後に聞いたところ、ヨーロッパではその昔日本以上に大変な環境破壊があり、それが人為的に新しい環境として見事に創造されたということです。

九大も来年からキャンパス移転の実務が始動するようですが、その基本構想に謳われているように、センターオブエクセレンスに相応しいすばらしいキャンパスと校舎の構築がなされることを期待します。人間は生来保守的で、大きな利益でもない限り現状維持を望むのが常ですが、この際は我らが愛する九大100年の大計のため学部、学科のエゴを捨て円滑な改革と移転が行われるよう切望致します。

私は旧制度の大学を卒業しましたが、教育研究は初期の頃から新制大学で携わってきました。今その新制大学の終焉を迎え大改革がなされようとしています。このような折、老兵が後進に全てを托して去り逝くには最も時宜を得たものと心得、今後はただただ九州大学の発展を見守って生きてゆきたいを思います。永年のご厚情有難うございました。